淨瑠璃雜誌
第四百二十四號

古靱藝術の完成

文學博士　太宰施門

義大夫淨瑠璃の大夫は其の本文を節を附けて朗誦する。本文はどういふ種類のものか。戯曲の部分が特に嵩張つて擴がり、延び上つた敍事物語である。情景の描寫もあり、人物の動きの報告もあり、思想や感情の表現もある。それらを一々その場合に應じて的確に述べ、眞實であるやうに語り讀むのが眼目である。さうして事柄は人の成し得る仕事の中で、もつとも難かしい、至難事中の至難事であるとは古今の識者、鑑賞者が例外なく認めてゐる事實である。

我が豊竹古靱大夫師は五十五年間に通じた倦まない研鑽の勞苦が報いられて、今度眞に名譽ある高い恩賞が與へられた。何びともそれが誤つてゐるとも過ぎてゐるとも非難するものはなく多少とも陰口めいた口上をきくものさへないであらう。それほどに師の藝術は今日實に高い水準にとどいてをり、しかも第二の位に推される他の大夫との間に、非常に大きい違ひと距離が示されてゐるのである。

それもさうである、義大夫淨瑠璃曲數百篇といふ中に、何の一つでもよい文樂の他の大夫が語つて古靱師以上の出來に達し得るであらうか。全然それが望まれず、考へにさへ上らぬほど、師の研究は深さの眞諦に觸れ、藝術は精巧の錬磨に鍛へられてゐる。たとへば「月冴えて」と師が讀めば、名月皎々たる大自然の景色が直ぐ浮び上る、「にじりより」では眼を瞑つてゐてもその動きが感ぜられ、「有難やかたじけなや」は心からの感謝を感激の情熱に寫して遺憾がない。文樂のほかの人では、この三部面の表現のどこでも古靱師の足もとへも寄りつけない現狀である。

從つて、藝術の眞の高さと價値を認め、功績者を天下に旌表した帝國藝術院賞こんどのことは、私にとつて近年もつとも大きい欣びの一つであつた。（京都帝國大學教授）